

〔デザインノート〕

# パブリックスペースに関するフィールドワーク報告

——新潟県十日町市におけるサイト・リノベーション（その2）——

杉浦久子・鈴木さやか・吉田織音

## 1. はじめに

昭和女子大学環境デザイン学科杉浦研究室では、建築の立場から人と環境、場所の関係をテーマに設計活動、フィールドワークを行ってきた<sup>※注1</sup>。本稿では2009年度に研究室にて行った活動を「パブリックスペースに関するフィールドワーク報告—新潟県十日町市におけるサイト・リノベーション—」としてまとめ、報告するものである。

## 2. サイト・リノベーションの定義と経緯

今日はスクラップ・アンド・ビルドの時代から、既にあるストックを見直してゆく時代へと変移しつつあると考えられる。社会のインフラの大半が整えられた状況の中では、単に建てることのみならず、既にあるものに加えることや差し引くこと、変更することや、積極的な意味において建てないことまでを視野に入れ、場所に建築を建てるという行為そのものや、既にある場所の意味を考えてゆくことが、より重要になってきていると思われる。

そこで、「様々な既存空間の質を再発見し、その意味を見出し、人を含む空間全体を関係づけてゆくような環境をつくりだすこと」を「サイト・リノベーション」と名付け、10年ほど前から、東京や新潟、千葉などのまちで活動を行ってきた。

具体的にはインスタレーションというアートの手法を用い、まちに（仮設）空間を設置し「場」に「出来事」を起こした。その多くは地域のコミュニケーション・スペースとして機能してきた。

## 3. 新潟県十日町市におけるサイト・リノベーションの目的

ここで言うパブリックスペースとは、「文字どおりの公共空間と、私有地であっても公共性が高いと考えられるスペース」を指す。まちの中には様々な理由により意外と上手く使われていないニッチなパブリックスペースがある。こうした場所を発見し、「サイト・リノベーション」のフィールドワークを行ってきた。

新潟県十日町市におけるサイト・リノベーションは「越

後妻有アートトリエンナーレ・大地の芸術祭」というアートイベントに参加する形で行ってきた。

この芸術祭は、過疎高齢化に悩む越後妻有を舞台にしている。地域に内在する様々な価値を、アートを媒介として掘り起こし、その魅力を高めて世界に発信し、地域再生の道筋を築いていこうと、2000年より始まった3年に1度行われる国際的な祭典である。今回は地域と都市、アーティストと里山、若者とお年寄りの交流と協働の中から生まれた約350点のアートが、集落や田んぼ、空家、廃校、計760km<sup>2</sup>のフィールドに展開する。

杉浦研究室は、2003年、2006年、2009年と今回で3回目の参加である。毎回、新潟県十日町市本町西1丁目の同じ場所で「サイト・リノベーション」のフィールドワークを展開してきた。

このフィールドワークの目的は、豪雪地帯特有の集落の形式がわずかながら残っている同地区の地域資産を、他地域の人に伝えること。また、不幸にも新潟中越地震により、再生の目処が立たないまま空地となってしまった、この場所の意味や歴史を伝えること。さらに、地域にとって馴染み深いこの場所を、地域内外の人々のコミュニケーション・スペースとして3年に一度出現させ、継続してゆくこと、である。

## 4. 「雪ノウチ」プロジェクトの概要

十日町市は豪雪地帯で有名な場所である。杉浦研究室では「越後妻有アートトリエンナーレ・大地の芸術祭」の中で、「ユキノウチ」（2003）（写真1, p. 60）, 「幸（ユキ）のウチ」（2006）（写真2, p. 60）, 「雪ノウチ」（2009）（写真15, p. 63）と継続的に雪を題材としたフィールドワークを行い、発表してきた。雪国特有の集落の形式が残るこの地域には、隣地との間にある雪下ろしスペースが、夏は近所の通路として機能することを活かし、2003年は、家と家の隙間をネットでつなぎ、家々が雪に埋もれたような空間を表現した。7棟の家々（ウチ）とネットで囲まれたプライベートな空隙（ウチ）に入り、雪の中（ユキノウチ）のような空間でここに暮らす人と来場者との交流が生まれた。しかし2004年に、この土地を新潟中越地震が襲い、2003年の風



写真1 2003年 ユキノウチ



写真4 雪玉の表現



写真6 地域の人との折り方ワークショップ

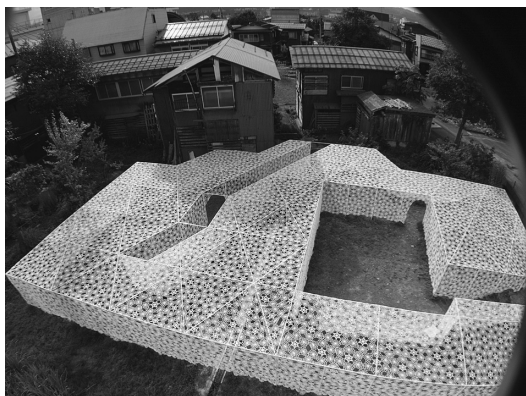


写真2 2006年 幸（ユキ）のウチ



写真3 「雪ノウチ」敷地



写真5 折り紙でのスタディ



写真7 学校での作業風景

景は歪められ、空地となった。そこで2006年には、この地に再び幸せが訪れることを願い、学生や十日町の方々と白い梱包用の紐で雪のレースを編み、家（ウチ）を表現し、地域内外の人々の交流スペースを作った。

2009年「雪ノウチ」では、未だに空地のままのこの場所に雪の降る瞬間を表現した（写真3, 写真4, p.60）。人々によって折られた無数の雪がこの場所に新たな景色をつくり、ポーラスな雪の結晶の空間は交流空間として機能した。

さらに、この「雪ノウチ」の再展示を「雪ノウチ\*snow café\*」と命名して、秋の本学の文化祭、秋桜祭で行った（写真21, p.64）。新潟で屋外展示であったものが、80年館1階学生ホールの屋内展示となった。見慣れたキャンパスの片隅が非日常の空間となり、新潟の方々と学生等の折った雪の結晶体の空間が、新たな人と人を繋ぐ空間となった。

## 5. 設計プロセス

杉浦研究室における話し合いの中で、「夏に雪が降っているような空間を体験できないか」というテーマが2009年3月頃出てきた（図3, p.64）。具体的なスタディの中で、まず雪の結晶を折り紙で制作する案が浮かんだが、その形態について試行錯誤を繰り返した（写真5, p.60）。雪が降っている瞬間を表現するために、約2000個の雪の結晶を制作することとなった（写真4, p.60）。ひとつの雪の結晶は24枚の折り紙でできており、十日町市や東京で学生や住民を含む約1500名の方々が折った（写真6, 7, p.60）。たくさんの雪の結晶によるポーラスな空間のボリュームの中にさらに洞窟のようなヴォイドをつくり、約200㎡の空地いっぱいの雪の降る空間の中に入り、動き回れるように計画した（図2, p.63）。また、「雪ノウチ\*snow café\*」においては、学生ホールの20400×18000（mm）の空間を16ブロックに分けた。これを雪の結晶の密度の差により、大きく4つのレベルに分け、分布させることで通り抜けられる場所を作った（写真20, p.64）。

## 6. 素材と構法の検討

素材はいつもその場所でわりと簡単に手に入るものを使用し、施工方法は簡単な方法であることや、セルフビルドやハンドメイドを目指している。

それは、基本的に地域の方々との協働作業を行う段階から地域間、世代間交流が始まるとの考えからであり、また、人々が日常生活の中で獲得した技や知恵、経験をデザインに取り込むことによって、技や知恵の継承を行い、だれでも参加しやすいデザインとしてゆきたいとの考えからである。

施工方法について、大地の芸術祭が開催される1ヶ月半の期間に予想される、台風等による雨風に耐え、かつ雪が降っているように見えるように雪の結晶をどのように吊るすか、その方法について、5月から6月の間に様々な案を試し、現地に行ってからでも試行錯誤が続いた（写真8, 9, 10, 11, 図1, p.62）。

さらに、秋桜祭での再展示では、状況が異なるため、施工方法も新たに考えた（図3, 写真19, p.64）。

また、日差しに耐えられるような素材についても、雪の結晶を外部に吊り、気候実験を行う中で接着材の問題などが浮上し、試行錯誤を繰り返した。その結果、折り紙には耐水性のあるポリプロピレン（ユポ紙）を、吊る糸には、その強度と透明性からフロロカーボン糸を用いた。また、現場では、2000個の雪の結晶を吊り上げるために入手しやすく、解体しやすい単管を使用した（写真12, 13, 14, p.63）。

## 7. デザインコンセプト

「雪ノウチ」は、以下の4つのデザインコンセプトによって成り立っている。

### ■参加するデザイン

杉浦研究室におけるフィールドワークは、多くのマンパワーにより成立する。その過程そのものがデザインコンセプトである。したがって、誰でも参加できるデザインが必要となる。

今回は雪の結晶を、誰もが行ったことのある折り紙という手法を用いて制作した。そのため、老若男女約1500名の様々な方々に協力していただくことができた（写真6, p.60, 写真16, p.63）。

また、「雪と着物のまち」十日町の人々の手先の器用さや、商店街の人々の店番の時間の利用など、地域の方々の経験や技を利用することもデザインの中に組み込んだ。また、作品周辺の地域の方々は、雪像づくりの経験や雪下ろしの経験があり、施工の段階でもそれらの技が生かせる面が数多くあった。

### ■ポーラスなボリュームと居場所

「サイト・リノベーション」の目的のひとつに居場所を作ることがある。何もない状態ではただ通り過ぎてしまうような場所でも、何か空間を作ることで居場所となり、人々の交流スペースとなる。作品の多くは人々のひとときの交流空間として機能してきた（図4, 来場者の様子1, p.65）。

今回は、雪の降る瞬間のポーラスなボリュームを空地に表し、雪の結晶の密度に差をつけ空間に分布させ、その中



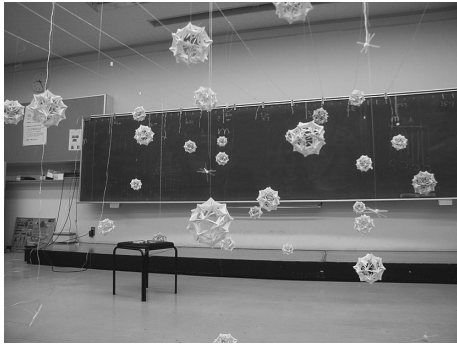


写真8 吊るし方スタディ 1

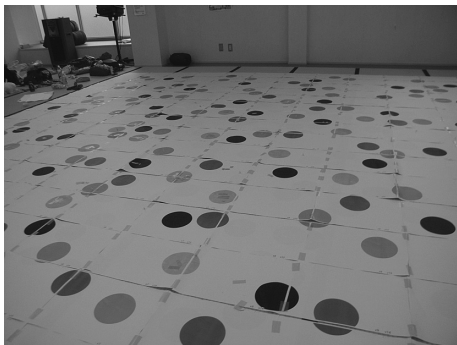


写真9 雪の結晶配置図

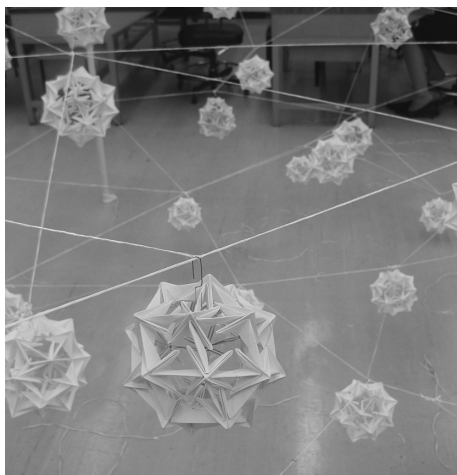
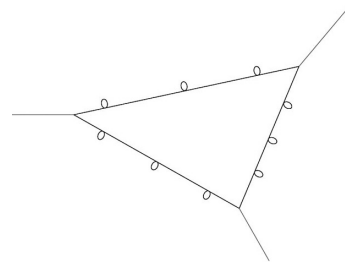


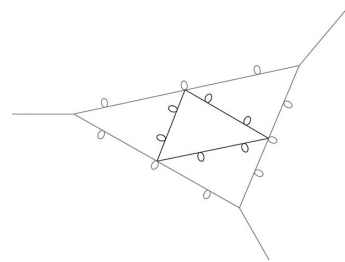
写真10 吊るし方スタディ 2



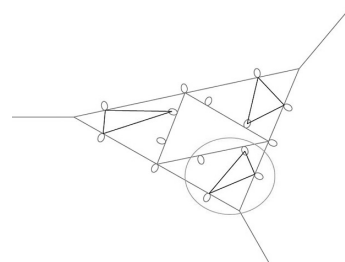
写真11 施工の様子



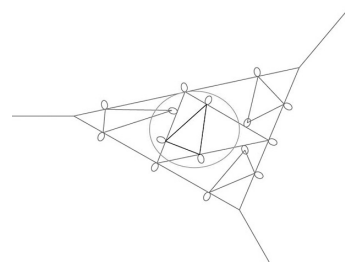
① 3角形の1辺にそれぞれ3つの輪を作る。



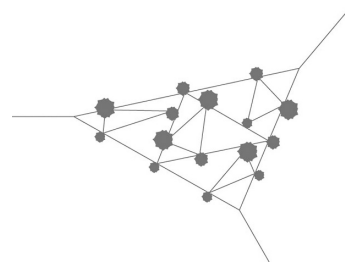
② ①で作った真ん中の輪どうしを1本の紐で繋ぐ。その時、1辺ごとに2つの輪を作る。



③ ①でできた輪と②で作った輪に紐を通し、さらに3角形を作る。残りの2ヶ所も同じように作る。



④ ③で余った3つの輪に紐を通し、3角形を作る。



⑤ 最後に雪の結晶を大中小5個ずつできあがったすべての輪につける。

図1 雪ノウチ 雪の結晶の吊るし方



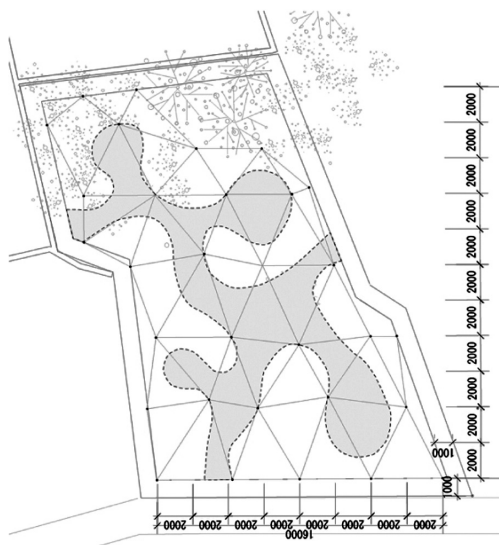


図 2 敷地図面



写真 12 単管の接続部分

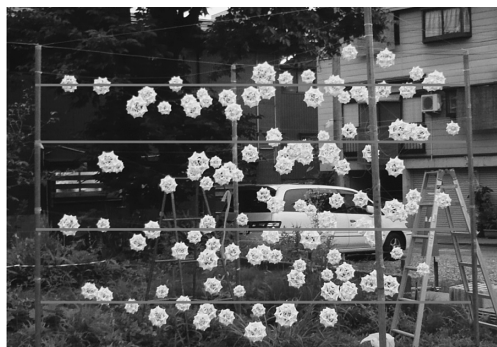


写真 13 層の位置

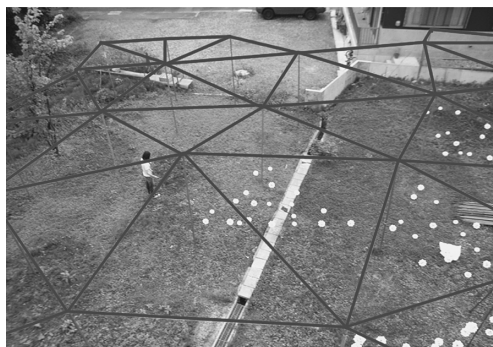


写真 14 上から見た柱とワイヤーの位置



写真 15 完成



写真 16 来場者に折り方を指導



写真 17 イメージ模型



写真 18 俯瞰景



写真 19 \*snow café\* 施工準備



写真 20 \*snow café\* 図面



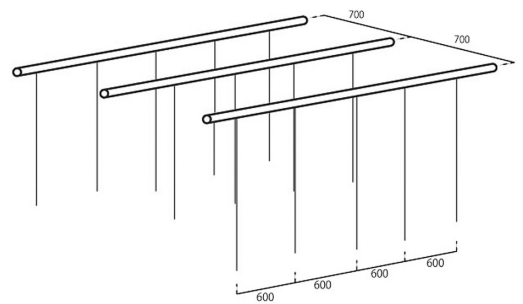
写真 21 秋桜祭での展示完成



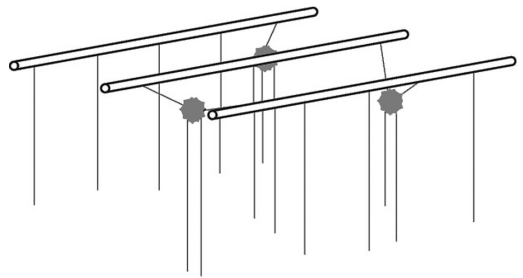
写真 22 十日町の店舗内展示



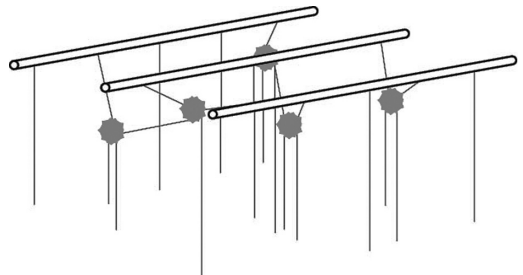
写真 23 雪まつりアーケード



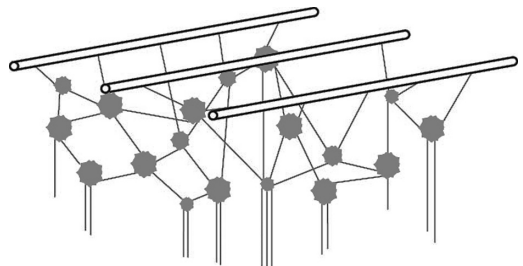
- ① 棒にテグスを 600 mm の間隔でつけ、5 本、4 本、5 本…と交互に天井にある梁と梁の間に 700 mm の間隔で棒を設置する。



- ② 雪の結晶と雪の結晶の距離が 700~1000 mm になるように 3 本のテグスで荷重を 3 方向へと分散させていく。



- ③ 雪の結晶を吊るときは必ず隣の棒からテグスを 1 本とる。3 本のテグスを様々な方向からとり雪の結晶につけフィックスさせる。3 本のテグスを様々な方向からとることで、ランダムな配置が生まれていく。



- ④ 1 ブロックの高さを 3 分割した。1400×2400×1000 (mm) の中に対し雪だま大中小を 5 個ずつ使う。

図 3 \*snow café\* 雪の結晶の吊るし方



	研 究 室	その他関係者	写	真
2 月	ミーティング開始（企画立案）  第1案ミーティング			
3 月	雪の結晶エスキス  第2案ミーティング			
4 月	吊るし方スタディ  新潟現地調査	敷地近隣の方々にプレゼン		
5 月	企画案決定  雪の結晶材料検討  雪の結晶気候実験	製紙会社の方々にプレゼン 打ち合わせ		
6 月	空間構成検討  雪の結晶制作開始  接着剤検討  施工材料、方法検討	新潟で折り方ワークショップ 施工打ち合わせ  十日町分庁舎の方と打ち合わせ		
7 月	模型完成  搬入（東京→新潟）・現場作業開始  吊るし方決定  雪の結晶を吊るすネット制作開始  26 日 施工完了・大地の芸術祭開幕	単管埋め込み作業 制作・施工手伝い  作品説明		
8 月	作品説明（毎週末）	製紙会社作品見学		
9 月	5 日～6 日: ライティングイベント  13 日 大地の芸術祭閉幕  20 日 片づけ・打ち上げ  搬出（新潟→東京）	ライト設置協力  20 日 片づけ・打ち上げ		





に通れる場所、止まれる場所<sup>とど</sup>などの居場所を計画した（写真 17, p. 63）,（図 3, p. 64）,（図 4, 来場者の様子 2, p. 65）。その結果、多くの方々がここを訪れた。来訪者は思い思いに空間に佇み、休憩したり、回遊しながら夏空の雪の風景や空を楽しんだり、話をしたりしていた。近隣の方々と立ち話をする姿もしばしば見られた。また、近隣の子供たちにとっては遊び場として機能していた。

1ヶ月半の展示期間を経た後、雑草が生え地面が緑で覆われた。その結果、図らずもその中に、ここに立ち寄り時を過ごした人々の居た場所のみ、地面のままとなり、敷地に人々の軌跡が残った（写真 17, 18, p. 63）。

秋に学生ホールで再展示した際も、休憩スペース、輪投げスペース、フリーマーケットなど、他のイベントスペースを抱き込みつつ、様々な居場所が雪降る空間の中に内包され、交流空間となった。

## ■異空間

十日町では住宅地域内の空地、学内は学生ホールという日々生活する空間に「雪ノウチ」を展開させた。真夏の青空の下や大学建物内に、雪が降る瞬間を留めた状態という、ありそうであり得ない非日常の空間を作った。

日常に立ち現れる「ファンタスマゴリー（幻想空間）」は、虚と現の間で日常を一瞬煌めかせることとなった。

## ■サイトの条件

デザインに関係する材料、方法、テーマはできるだけサイトの環境条件・ヒト・コト・モノを様々に読み込み、地域資産を織り込みたいと考えている。

十日町には、「雪」という地域資産がある。これを利用して、冬に行われる「雪祭り」では雪像展示を行っている。しかし、地域の人々と話をしていると、たいいてい、雪は厄介者として認識されている。特に降る雪は美しい、という感覚は地域の方々には馴染まない感覚であるらしかった。この作品を見た地域の方々から「降りしきる、ぼた雪のよう」、「雪の降る姿はきれいなね」としばしば言われた。降る雪の美しさは共通の認識であると考えていたため、意外なことであった。

このように、地域には、そこに暮らす人々には当たり前すぎて気付かなくなっている地域財産がたくさんあり、その価値を発見するのには、外部の視点が必要であるように思われる。

## 8. その後の展開

雪が降る瞬間の美しさに感銘を受けてくださった方々が、様々なところでこの雪のプロジェクトを広めてくださって

いる。新潟の芸術祭で降った雪の結晶は秋の大学の文化祭で東京に戻り、冬の「十日町雪まつり」で再び新潟へ戻ることとなった。2月下旬、商店街や地域住民の協力により、約 1000 玉を十日町のメインストリート、本町通り商店街アーケードに飾った（写真 22, 23, p. 64）。

さらに、「雪ノウチ」を気に入ってくださった他の自治体でも雪の結晶を自主的に折り、地域のひな祭りに合わせて雁木の下に展示を行うなど、私達の想像を超えて雪の結晶は新たな展開を見せ始めている。

## 9. まとめ

杉浦研究室のメンバーと地域の方々の交流はもう 7 年になる。この間様々な変化があり、図らずも同じ場所を定点観測するようなこととなった。3 年ごとに、「ユキのウチ」という同じテーマに基づき出現と消失を繰り返す空間を展開してきたことが、今後何をもたらすのかは、まだ実験途中であり、よくはわからない。ある時期だけ、非日常の空間が立ち現れては消える。「残そうか」といった話も地域の方達から出たこともある。しかし、「消えることによって記憶に残り、次が生まれる」と、これも地域の方から言われ学んだことである。

考えてみれば、祭りのような空間であるが、その空間はその時々を読み込み変化してゆく。

ほんの少しの想像力を羽ばたかせると、日常空間のあちこちに生き生きした場所がある。様々なささやかな日常空間にこんな場所が広まっていくことを願っている。

## ■掲載

- 1 読売新聞 上・中越版 2009 年 7 月 26 日
- 2 新潟日報 2009 年 7 月 31 日
- 3 十日町新聞 2010 年 2 月 10 日
- 4 建築ジャーナル 2009 年 10 月号  
五十嵐太郎の先読み編集局 越後妻有トリエンナーレ 2009 アートの臨界点を突破せよ！「雪ノウチ」他 掲載ページ: p. 32, 企業組合建築ジャーナル
- 5 新建築 2009 年 12 月号  
EXHIBITION 掲載ページ: p. 28, 新建築社
- 6 建築ノート 2010 年 No. 8  
日常空間に有りつつも見えないものを想像する 掲載ページ: p. 118, 誠文堂新光社
- 7 大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ 2009 杉浦久子+杉浦友哉+昭和女子大学杉浦ゼミ 掲載ページ: p. 70, 現代企画室

#### ※注1

- ・『学苑』平成16年11月号 No. 769 pp. (6)-(21)「パブリックスペースに関するフィールドワーク報告—居場所をつくる サイト・リノベーション—」(杉浦久子・木村映理子)
- ・『学苑』平成17年7月号 No. 777 pp. 107-118「パブリックスペースに関するフィールドワーク報告—二子玉川におけるサイト・リノベーション—」(杉浦久子・角屋・ゆず)
- ・『学苑』平成19年7月号 No. 801 pp. 96-105「パブリックスペースに関するフィールドワーク報告—新潟県十日町市におけるサイト・リノベーション—」(杉浦久子・清水麻里)
- ・『学苑』平成20年7月号 No. 813, pp. 86-100「パブリックスペースに関するフィールドワーク報告—世田谷区北烏山屋敷林市民緑地におけるサイト・リノベーション—」(杉浦久子・清水麻里)
- ・『学苑』平成21年7月号 No. 825, pp. 55-64「パブリックスペースに関するフィールドワーク報告—商店街空き店舗におけるサイト・リノベーション—」(杉浦久子・大中愛子・中村萌)
- ・2002年度学術講演梗概集 F1 pp. 917-918「パブリックスペースの有効利用に関する研究（その1）世田谷アートタウンにおける実践—インスタレーションによるまちづくり—」(杉浦久子・河野ひろみ)

#### ■参加メンバー

杉浦久子+杉浦友哉+昭和女子大学杉浦ゼミ

浅山知美 石橋奈緒美 井野由美子 大竹那奈 加藤舞 金森友恵 後藤友香 斉藤美鈴 杉浦冬悟 鈴木さやか 清藤祥恵 曾我美乃 高畑緑 滝澤唯美 塚越由里 中川真衣 長久保麗子 中村友衣 早坂美紀 深谷美波 前田悠香 水尾綾香 山田安紀 山本小百合 横川友理 吉田織音 吉田美樹 吉田有里 吉村紀子 和田彩里 渡邊里沙

(すぎうら ひさこ 環境デザイン学科)

(すずき さやか 生活機構研究科1年)

(よしだ おりね 生活機構研究科1年)